

フィレンツェの「ガリレオ」から
京都の地球惑星科学史まで
—伊藤和行さんを偲んで—

山田 俊弘*

From 'Galileo' in Florence
to the History of Geoscience in Kyoto:
Remembering Professor Kazuyuki Ito

Toshihiro YAMADA

伊藤和行さんと最初に会ったのは、1987年8月11日フィレンツェの図書館で、まったく偶然からだった。当時私は高等学校で地学を教えながら科学史研究を始めたところで、とくにニコラウス・ステノ (1638-1686) と西洋地質学史をテーマに資料探索のため長期休みを利用し渡欧していた。前年の1986年はステノ没後300年だったので生地のデンマークを中心に訪れ、1987年は西ドイツからイタリア、フランスをめぐるしていた。

イタリアはステノの地質学的な研究が開いたところだが、とくにフィレンツェはトスカーナ大公フェルディナンド2世治下、ガリレオの教えを継ぐ実験アカデミーの活動が残っており、ステノはそこで厚遇を受けて歴史に残る『プロドロムス』(1669)等の著作をなした。フィレンツェの国立中央図書館 (Biblioteca Nazionale Centrale) には、そのステノの手稿が、ガリレオ・スクールの諸資料のなかに残されているというので尋ねたわけだった。

しかしあらかじめ申し込みをしていたのでもなくその場で図書カードをめくって交渉するというやり方であったから、資料名を書き出して、閲覧したいと受付に申し出たものの、拙い英語がうまく通ぜず立ち往生してしまった。そこに通りがかったのが伊藤さんだった。東洋人が困っているのを見て「韓国人か」と英語で聞いてきたので日本人だと答え、それ以降日本語でのやりとりとなった。

* 大正大学非常勤講師

イタリア語で事情を説明してもらい、何とかコピーを取ることができた。このときは本当に助かった。その後、昼食を一緒にして(昼間からワインを飲み)、フィレンツェ大学の碩学パオロ・ロッシ教授のところに留学している科学史家の卵と分かり、日本での共通の知人もいて話は尽きなかった。もう帰国の準備をしているとのことので下宿に行くと段ボールの山だった。

帰国後は日本で何度か科学史学会のおりに会って話をする程度で、関心のある時代は共有しても分野の違いからあまり深いおつき合いはなかった。2009年以降だったと思うが、私が京大の地学、とくに地球物理学の制度化に関心を持ち、京大理学部図書室に調べ物に行くようになって、私が文学部の伊藤さんの研究室を訪ねたり、理学部の図書室にいっしょに見学に行ったりするようになった。

よく覚えているのは、2015年8月終わりに「新城新蔵新研究」と題して人文研でワークショップをしたときで、伊藤さんは2日間にわたって出席、有益なコメントをくださった。2日目の午後には参加者とともに宇宙物理学教室図書室の「新城文庫」を訪ねて調査もされている。後に2017年度の前期の演習授業で新城新蔵を取りあげたと聞いた。

この頃には学生指導の必要もあってか、日本の科学史にも関心を持たれており、2016年末の科学史学会西日本大会のおりにいただいたゼミ資料「江戸の博物誌」は、それまでの伊藤さんのイメージからは意外だった印象が残っている。日本科学史、とくに地震学史や地球物理学史への関心が一過性ではないと感じたのは、古文書を読む古地震学の研究会に参加して、ついには2017年秋の京都での国際会議の場で明治期の地震学、とくに歴史地震学(古地震学)の誕生について報告されたときだ(英文報告をいただき意見を求められた)。2018年2月に会ったときには、科学史学会の欧文誌 *Historia Scientiarum* の編集に関して、イタリア人科学者による大森房吉に関する論文について逆に意見をうかがう機会があった。

地磁気逆転層や重力測定の研究で有名な「地物の松山基範について、最近関心を持っています」とメールにあったのは、2016年12月のことだった。2018年2月のメールでは4月からの演習で松山を扱うと連絡があり、ちょうどその年の3月に東京の科学史研究会で松山についての話題提供があったので関連する資料を送ることになった。しかし、「17世紀科学史も、江戸から戦前の日本科学史も研究しようという学生はなかなか現われてくれません」という嘆きの言葉も聞かれる(2018年2月16日付メール)。

17世紀科学史については、2017年2月に私が自分の博論を『ジオコスモスの変容』

として出版し、5月には伊藤さんがガリレオの翻訳『星界の報告』を出されたのでやりとりがあった。『星界の報告』の紹介文を『化学史研究』に投稿したさいに、引き続いて太陽黒点論や新科学論議の翻訳も期待したいとつけ加えたが、実際にそのようなプランをお持ちだったようだ。

フィレンツェで伊藤さんと時間を共有したのはわずか3日間だったが、振り返ってみると、私自身の科学史研究の原点となった。お元気であれば、ジオコズミックな科学史について意見交換をできる機会もあっただろうにと思うと、喪失感を拭い得ない。あらためて合掌して遺徳を偲ぶ次第である。